

かわさき区の宝物シート

宝物No.	こどろ(ことろ)ばしのおやばしら(ぎぼうし)
2-7	小土呂橋の親柱(擬宝珠)

エリア	中央地区	シーズン	通年
	川崎駅前南	日時	

目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る	<input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する
	<input type="checkbox"/> 食べる	<input type="checkbox"/> その他
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり	<input type="checkbox"/> イベント・祭り
	<input type="checkbox"/> 味づくり	<input type="checkbox"/> にぎわい
	<input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの	<input type="checkbox"/> 港めぐり
	<input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの	<input type="checkbox"/> 人物

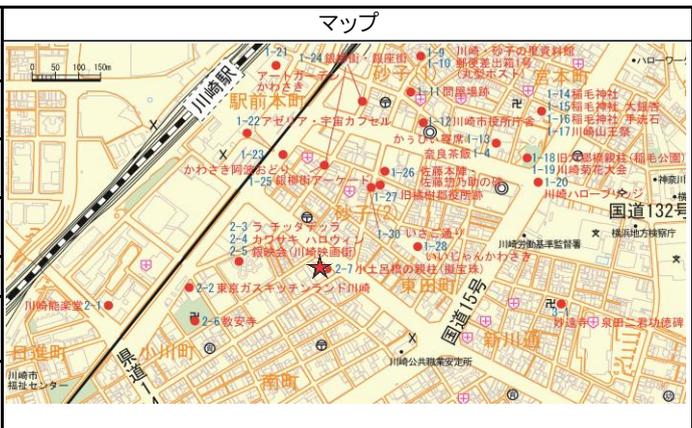


案内板（昭和6年、埋められる直前の頃の新川堀と小土呂橋）



稲毛神社境内の小土呂橋遺構

所在地	川崎区小川町14-1（新川通り歩道）
問い合わせ	NPO法人かわさき歴史ガイド協会 東海道かわさき宿交流館
TEL	044-221-9117（かわさき歴史ガイド協会） 044-280-7321（東海道かわさき宿交流館）
FAX	044-221-9117（かわさき歴史ガイド協会） 044-280-7314（東海道かわさき宿交流館）
E-mail	
URL	
交通	JR川崎駅より徒歩5分



基礎情報

■現在の新川通りには、江戸のはじめに開削された「新川堀」が流れ、東海道と交わる場所には石造りの「小土呂橋」が架かり交通の要所としてにぎわっていた。特に明治末から大正にかけて臨海部には工場群が建ちはじめ、新川堀の土手の道は川崎駅と臨海部を結ぶ輸送路として重要な役割を果たすようになり、小土呂橋の周辺はたいへん活気があったといわれる。

■輸送路の機能の拡充と大恐慌による失業者対策として新川堀の下水暗渠化と道路拡張が決定したのは昭和5年(1930)のこと。翌年12月に工事は始まり、新川堀はコンクリート水路として地中化され、小土呂橋も堀とともに埋められてしまった。この時、埋められずに撤去され付近の民家に引き取られたのが花崗岩製、高さ130cmの立派な親柱（擬宝珠）であった。そして数十年を経て、その存在に注目が集まり一時的に教安寺に移された後の昭和59年(1984)、市政60周年記念にと小川町町内会によって元の場所、小土呂橋交差点脇の歩道に復活を果たした。

■翌昭和60年(1985)7月のこと、小土呂橋交差点の真ん中が陥没する事故が起こった。直ちに開始された復旧工事、周囲の路面がはがされると、下から小土呂橋の一部とみられる石柱や石板などが発見されたのである。市教育委員会によって調査・復元された「小土呂橋遺構」は現在稲毛神社境内に鎮座している。

由来・エピソード

■江戸時代、川崎宿を構成していた4つの町のひとつが小土呂町（現在の小川町）である。八丁畷の西側一帯は秣(まぐさ)沼、鷄(ばん)沼と呼ばれる大きな沼があり将軍家の鷹狩場となっていた湿地帯であった。六郷川（多摩川）の洪水時に氾濫した水を貯め、水位が下がると古川（現在の銀柳街）を通じて六郷川に排水された。しかし増水が長引くと排水は容易でなく、度々冠水し東海道の往来に支障をきたした。農業生産性も低い土地であったため、水田耕地の安定と収入の向上のため、慶安3年(1650)幕府直営により新たな排水路「新川堀用水」が開かれた。全長2.1km、幅5.4mの流れは大島村の入樋（水門）を経て江戸湾へと注ぎ、「悪水」を海に直接排出することが可能となった。

■当初の小土呂橋は木の橋だったが、享保11年(1726)に田中休愚が石橋に架け替え、3年後にはベトナムから幕府に献上される象が渡った。寛保2年(1742)の洪水によって大破したが、翌年に幕府御普請役水谷郷右衛門が新たな石橋を再興した。以来この石橋が明治・大正を通じ190年間にもわたり人々の往来に供されてきたが、昭和6年(1931)からの工事によって親柱など上部の構造物を残しあとは新川堀もとも埋められた。そして50年が経過し、親柱が小土呂橋交差点に復活したその翌年、埋められた小土呂橋の一部が陥没した道路の下から発掘されたのである。

■石柱に刻まれた銘文（設置年代・設置者・石工の名前など）から、寛保3年築造の石橋であることが明らかとなった。小土呂橋は市内に残る少ない近世石造橋の中で最も年代が古く、幹線街道に幕府御普請所によって架橋されたことから当時の事情や構造等を解くことができる諸々の資料も残されており、史料価値の高いものであるという。なお、この花崗岩製の親柱（擬宝珠）は大正時代に高欄などととも新たに付けられたものとみられている。

補足・その他

■新川堀には小土呂橋の他にも、新川橋、さつき橋などの橋が架かり、今でも交差点やバス停に名前を残している。新川橋のあった第一京浜の交差点名は「南町交番前」であったが、由緒ある新川橋の名を残そうと平成17年9月、川崎区連合町内会、川崎今昔会、川崎中央観光協会、NPO法人かわさき歴史ガイド協会、東海道川崎宿2023など多くの団体が連名で国交省あて要望書を提出した。その結果、平成18年2月に正式に「新川橋」と地点名標示板の名称が変更された。

関連シート

- (1-1)川崎宿
- (32-2)田中休愚
- (1-23)銀柳街・銀座街
- (1-14)稲毛神社